



旧和田家住宅 外観



旧三橋家住宅 外観



旧和田家住宅 土間境



旧三橋家住宅 土間境



旧和田家住宅 主室（オクノマ）



旧三橋家住宅 主室（デー）

旧三橋家住宅の普請の様相と平面・意匠の地域性

小沢 朝江^(*)1)

1 はじめに

旧三橋家住宅（図1）は、市の民俗資料館分館として茅ヶ崎市堤に所在する民家であり、棟札から文政11年(1828)の完成とされる。元は現在地から約1km西の市内香川にあったが、昭和46年(1971)に所有者から市が寄贈を受けて市の重要文化財に指定し、昭和48年に現在地に移築した。

文化財指定の趣意書によれば、①江戸時代末期の民家の造りを残していること、②修繕や改造が少ないこと、③建築年代や建設の経過を表す記録を備えていること、の3点が指定理由として挙げられている。③の「記録」とは、棟札および「普請帳」と呼ばれる文書を指し、三橋家の場合、『大工木引萬控帳』1冊が残されている^{注1)}。「普請」とは、広くは「建物を建てること」を意味し、「普請帳」は普請に関する人・物・金銭の記録である。建築年代が文書や棟札などの「記録」によって判明する事例は「基準作」と呼ばれ、記録が無い事例の建築年代を推定する「物差し」として重要な意味を持っている。

茅ヶ崎市にはもうひとつ文化財民家がある。旧和田家住宅（図2、旧所在地・市内萩園）は、旧三橋家より約30年後の安政2年(1855)の上棟で、昭和57年に市文化財に指定、昭和60年に市内堤の旧三

橋家住宅近くに移築された。やはり複数の普請帳が現存し^{注2)}、この文書から工程や材料の入手場所、職人や手伝いの移動圏など、普請の実態が詳細にわかることは既に報告した^{文1)}。

そこで、この2つの民家の普請の様相と、それによって造られた平面・意匠を比較することで、茅ヶ崎市の民家の特徴と変容を検討し、2棟の地域文化財としての価値を改めて考えてみたい。

なお、本稿では建物を指す語としては文化財指定名称に沿って「旧三橋家住宅」「旧和田家住宅」と呼称するが、普請等の分析に関しては「旧」表記を略し、三橋家・和田家の家名を用いる。

2 普請の工程

(1) 旧三橋家住宅の場合

まず、三橋家の『大工木引萬控帳』に記載された職人の出面（出勤状況）から、普請の経過をみてみよう。本史料には、近隣からの普請見舞の記録（

「普請中見舞覚」）のほか、材料の購入、および大工・先山・木挽・建具屋・畳屋等の関する記録がある。先山は山から木を伐採する職人、木挽は先山が伐採した木を板や角材に製材する職人で、明治中期以降の機械製材への移行以前は、建築工事に不可欠の職



図1 旧三橋家住宅 外観



図2 旧和田家住宅 外観

能だった。

木挽と大工の出面に注目すると、まず大工は、文政10年(1827)8月25日に「町な立」(鉦立)、9月13日から始まりとある。棟上はこの2ヶ月後の11月14日で、この日のみ仕事師(鳶職)2人も参加し、大工・木挽に祝儀が出されている。大工の出面は、仕事を始めた9月13日から棟上までが延べ177人、以降は12月が26人、1月が43人、2月が26人で、2月29日が最後である。三橋家には、普請帳以外に棟札が現存し、「于時文政第十一丁子正月大吉旦 普請成就之处」と記す。これによれば、普請成就是文政11年1月だが、実際には翌2月まで職人が入り、普請が続いていたことがわかる。

一方木挽は、文政10年7月9日が最初で、大工より2ヶ月ほど早く、7月中に4人半、8月に20人が働く。木挽が大工より一足早く仕事量が多いのは、大工の工程に先んじて材を準備する必要があるからである。以後は、9月に44人半、10月に39人半、11月に21人半と続き、12月は7人半に激減するが、以後も2月2日まで仕事をした。

この木挽と大工の仕事をグラフ化したものが図3で、11月14日の棟上の後、11月23日に屋根屋の支払いの記録があり、また畳屋は文政11年2月23日、建具屋も同年1～2月に「しょうじ代」等の支払いが見られることから、大工の仕事と合わせ、1～2月に内部造作が進んだことがわかる。

すなわち旧三橋家住宅は、文政10年7月から翌年2月末までの約7ヶ月で完成したこと、軸組・小屋組を作る建方に4ヶ月、棟上・屋根葺き以降の内部造作に4ヶ月を費やしたことがわかる。職人の工数は、大工は建方が177人、内部造作が95人の延べ

212人、木挽は延べ150人半で、大工と木挽の工数の差は小さい。

なお、建具屋は同年4月12日にも支払いがあり、さらに10月16日には「戸棚四本」、文政13年10月に「茶たんす、つくえ」など、以後も追加の注文があって、徐々に内装が整えられたことが窺える。

(2) 旧和田家住宅との比較

一方、旧和田家住宅は、職人の出面について『職人日記帳』『造作職人帳』の2冊の記録が残る。

大工が仕事に掛かったのは安政元年(1854)12月22日で、翌安政2年1月4日以降出面が連続する。仕事量の推移をみると(図4)、安政2年1月中旬以降一気に工数が増え、3月中旬から4月中旬にピークとなり、4月14日に棟上を迎え、以後激減する。棟上までの約3ヶ月の延べ人数は427人半で、後述のように大工はこの時期7人の名があるから、毎日最低5人は仕事をしたことを意味する。

一方、木挽は安政元年11月22日に「初メ」とあり、同年11月下旬から12月下旬が延べ72.5人と多く、さらに安政2年2月に再び増加する。大工より一足前に仕事を始める点は三橋家と共通する。

棟上後は、4月20, 21, 25日に32人の屋根屋によって屋根葺きが行われ、続いて左官が6月下旬から7月中旬に外壁工事を行った。屋根・外壁をまず完成させるのは、天候に左右されず内部造作を行うためである。

この後、大工は5月4日から7月中旬まで、木挽も4月中旬から6月上旬まで仕事をしていない。これは、5～7月が農繁期に当たったためで、民家の普請ではこの期間工事を休む例は多かった^{文2)}。三橋家

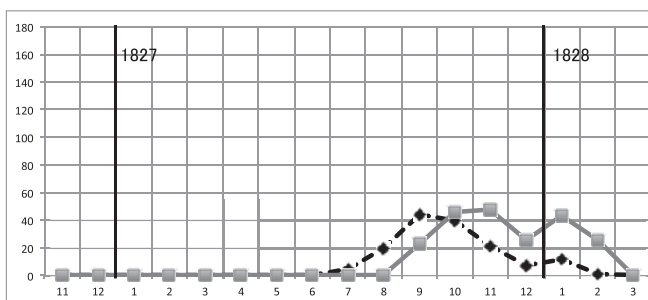


図3 三橋家の普請における大工・木挽の工数

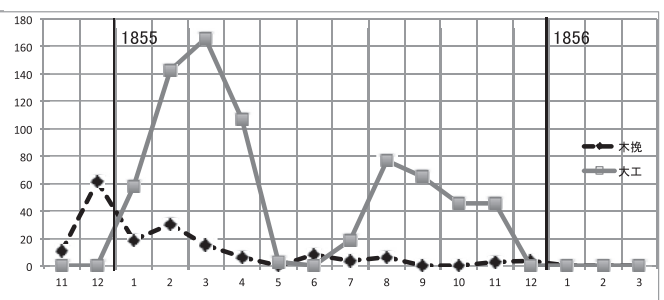


図4 和田家の普請における大工・木挽の工数

の普請が8月後半から本格化するのも、やはり農繁期を避けたためと考えられる。

和田家では、農繁期を過ぎた7月下旬以降、大工が再び増え、内部造作にかかる。大工の出面は11月25日が最後で、また畳屋は9月中旬～10月上旬と11月前半、左官は11月前半に仕事をしており、建具屋のみ翌安政3年3月までずれ込んだ。

したがって、旧和田家住宅は、嘉永7年11月から翌安政2年11月末のほぼ1年で完成したことになる。職人の工数は、大工は棟上までが427人半、以降が301人、計728人半で、三橋家の約3.5倍である。後述のように、旧三橋家住宅は桁行10間・梁間4間半(42坪)、旧和田家住宅は桁行11間半・梁間5間半(61.5坪)で、規模が異なることも理由だが、和田家は特に内部造作の工期が三橋家より1ヶ月以上長く、造作に凝ったことが窺える。

その一方、木挽は和田家が延べ167人半、三橋家が150人半で、大工に比べて圧倒的に差が小さい点が注目できる。

3 職人の居所と材料の調達

(1) 職人の居所

では、これらの普請に関わった職人は、どこから

仕事にきたのだろうか。両家の職人の居所と名前をまとめたものが表1・図5である。

まず大工は、三橋家では高田村の五郎左衛門を筆頭に伝三郎・友次郎・万蔵・長五郎の5名の名がある。五郎左衛門は、高田村で幕末に組頭や名主役を勤めた水越家の祖先に当たるとされ、安政6年(1859)没の五郎左衛門も大工と伝える^{注3)文3)}。三橋家では完成の2年後の天保元年(1830)にも延べ46人の出面がある。一方和田家は、棟梁の亀吉を筆頭に、徳松・平助・逸作・米吉・金蔵・仙太郎・常蔵・太右衛門と、内部造作の一部のみ惣五郎・兼二郎が関わる。このうち棟梁の亀吉は南湖村^{文4)}、米吉は須賀村、仙太郎は矢畑村の大工で、須賀村のみ相模川対岸だが、いずれも和田家から2km以内にある。ただし常蔵は「江戸京橋人、スカ米吉せわ」とあり、大工米吉の紹介で普請後半から加わった渡り大工で、同様に太右衛門も安政2年9月以降南湖村から雇うなど、居所の広がりが見える。

次に屋根屋は、三橋家は平蔵のみで、「普請中見舞覚」によると三橋家の所在した香川村住とみられる。一方和田家は、先述の通り32人の名がみられ、その居所は和田家が所在した萩園村内の辻が14名で最多だが、他は今宿村・馬入村・南湖村・円蔵村・



図5 和田家・三橋家の建築職人の居所

職種	和田家		三橋家	
木挽	円蔵村	鉄蔵(惣助、三郎兵衛)	寺尾村	勘兵衛
大工	南湖村	亀吉(徳松、平助、逸作、金蔵、太右衛門)	高田村	五郎左衛門(伝三郎、友次郎、万蔵、長五郎)
	須賀村	米吉		
	矢畑村	仙太郎		
	江戸京橋	常蔵		
建具屋	小和田村	与五郎	四ッ谷	与五郎
	芹沢村	勝五郎	芹沢村	新兵衛
	下町屋村	伊勢松		
畳屋	中条村	源蔵、亀次郎、定吉		新八
先山			香川村	甚右衛門
屋根屋	辻(萩園村)	喜平治、伝右衛門、八郎左衛門、作左衛門、平三郎、喜平二、政二郎、鉄五郎、儀右衛門、清助、久次郎、口左衛門、安左衛門、四郎兵衛	香川村	平蔵
	今宿村	林右衛門、四郎右衛門、幸八、甚右衛門		
	馬入村	伝右衛門、太兵衛		
	円蔵村	沢右衛門、喜代蔵、桂蔵		
	岡田村	蔵吉、助左衛門		
	西久保村	梅吉、惣左衛門		
	香川村	常左衛門		
	南湖村	政右衛門		
	一之宮村	清五郎		
	中島村	茂右衛門		
	矢畑村	武兵衛		

表1 和田家・三橋家の建築職人

香川村・岡田村・一之宮村・西久保村・中島村・矢畑村で、岡田村・一之宮村は2 km 圏内を越える。つまり大工と屋根屋は、三橋家では自村または近隣に依頼する一方、和田家では多くの職人を必要としたため、渡り職人も含め広域から集めたといえる。

ただし、職種によって職人の居所に特徴がある。

木挽は、三橋家は寺尾村の勘兵衛、和田家は円蔵村の鉄五郎ほか3名で、これらは後にみる用材の調達場所に近い。

建具屋は、三橋家は四ッ谷の与五郎と芹沢村の新兵衛(新平とも記す)、和田家は小和田村の与五郎、芹沢村の勝五郎で、芹沢村住が共通することに加え、四ッ谷と小和田村は東海道筋で極めて近く、職人名も一致する。和田家から芹沢村・小和田村は5 km 以上、三橋家から四ッ谷も約5 km 離れ、他の職人に比べて遠いが、建具屋の場合、現場で製作するのではなく完成品を納入するため、多少遠くても支障がなかったのだろう。建具職のような造作職人は、大工や屋根屋と異なり、街道筋などに存在が限定されたため、依頼先が共通したとみられる。芹沢村は、明治12年(1879)の『皇国地誌村誌』^{文4)}によれば「農工兼業」が7人おり、東南部の丘陵の材を用いた木工等の存在が推測できる。和田家では、土間の大戸や障子・襖など大部分を芹沢村の与五郎が担当し、杉板戸八枚・仕切戸四枚など質の高い板戸のみ小和田村の勝五郎は担当していて、技能に応じて仕事を依頼している。

なお、造作職人のうち左官は、和田家では須賀村の徳蔵と中条村の松之助の名があるが、三橋家では記録が無い。三橋家では、専門の職人に頼らずに壁の造作を行った可能性が指摘できる。

(2) 材料の調達

民家は、地域の風土に根ざした建築であり、材料もまた地元で入手したと説明されることが多い。三橋家については前掲の『大工木引萬控帳』に材料購入の記録が散見し、和田家については『居宅普請財木買入帳』に詳しい。

旧和田家住宅の用材は、修理工事報告書によれば、土台は檜、床組は檜・栗・杉、小屋組は大部分が松

とされる。また柱は、大黒柱など太い材は檜、座敷廻りの細い柱は杉が用いられ、敷居・鴨居・長押も松・杉・檜が使い分けられた。一方、旧三橋家住宅は、大黒柱とその土間側の柱(向大黒)は檜だが、他は柱・長押などの造作材も小屋材も松を主とする。

材種別にみると、まず檜は、和田家では大部分を近隣の西久保村から調達し、工事着手の3年前に当たる嘉永4年(1852)から伐採を始めた。同年12月27日に檜の立木5本を西久保村立野で購入、以後嘉永5年12月までに計15本を伐採した。この木材を木挽が加工するのは安政元年(1854)11月からで、檜は乾燥に時間がかかるため早期に準備を開始したとみられる。着工後も西久保村・円蔵村で購入しているが、量は少ない。一方、三橋家では文政10年(1827)8月30日に「八月卅日切、けやき四本、池田茂左衛門」、同年11月頃に「大こくけやき 円蔵村清兵衛殿」とあって、前者の池田茂左衛門は「普請中見舞覚」の記載から香川村の住人の可能性が高い。いずれも和田家と異なり普請着手後に当たり、この普請が火事など災害による復興であったことを窺わせる。

次に松は、三橋家では文政11年1月に「松の木代 吉兵衛払」とあり、吉兵衛は「普請中見舞覚」により香川村の住人とみられる。和田家もまた、松は香川村が中心で、安政元年11月から翌年1月に伐採した。香川村は、茅ヶ崎砂丘の北端部に当たり、明治12年(1879)の『皇国地誌村誌』に「篠山北部ニアリ平陵概地ニ出沒シテ蒼松灌木各処ニ散在シ水田田圃畠其間ニ開ケテ平地少シトス」とあるように、松などの灌木の小丘が点在した地で、地勢を活かして材を入手したといえる。

注目されるのは、和田家では立木を伐採する以外に、加工済の製材も購入している点である。津久井の牧野村・上青野原村(現相模原市藤野町牧野・青野原)から「栗角」「杉小角」や「五寸敷居」「しふく」(地覆)「大貫」「もみ正天井板」の購入記録があり、他にも須賀村(現平塚市須賀)の田中庄兵衛から杉丸太や杉の天井板、松の長押などの記録があって、量も多い。牧野村等からの購入材は、相模川の舟運を利用して運び、馬入の渡し付近から車に積み

替えて和田家へ運搬した。さらに和田家では、安政2年1月にオクノマの床柱の白檀を高麗寺村（現大磯町高麗）の角屋金兵衛から購入、安政3年9月にも平塚新宿から楠の板1枚を購入しており、銘木の流通が既に確立していたことが知られる。

次に茅は、和田家では西久保村・高田村・香川村・寺尾村で購入、竹は今宿村で調達したが、三橋家では茅も棟押さへの鉾竹も香川村内の太左衛門・由右衛門・厚七・喜兵衛・市兵衛らから購入した。

以上のように、三橋家は木材・茅とも村内での自給率が高い点、和田家は木材の商品流通に頼った点が特徴といえる。三橋家の所在する香川村は、和田家の松・茅等の入手先でもあって、材の調達に適した地だったことも大きい。和田家と三橋家では木挽の工数がほぼ同等だったことを既に指摘したが、和田家では加工材の購入が高率を占めたため、木挽の工数が少なくて済んだのに対し、三橋家では用材のほとんどを近隣からの伐採に拠ったため、木挽の仕事が多かったと推測される。さらに三橋家では、「普請中見舞覚」によると、大部分の村人が金銭以外に「縄かや」「すり縄」を見舞として持ち寄っており、材料を購入ではなく相互扶助でも入手していて、民家の原初的な普請の様相を強く残すといえる。

(3) 普請人足の供与

このような相互扶助の様相は、普請人足の供与にも現れる。

まず和田家では、村人が人足として多数参加したことが、『土方人足帳』『普請人足帳』に記録されている。仕事内容は多岐にわたり、安政元年11月～安政2年(1855)1月には松・樺の根返しと皮むき、伐採材の運搬（延べ277人）、安政元年12月～安政2年2月初旬には茅の刈り取りと荷作り・運搬（延べ88人）、同年2月9日～3月20日には古家の取壊し、地均しのための土運び、地業用の胴突櫓の組立て・胴突・取壊し（延べ419人）に従事した。4月14日の棟上では、3日前から準備のために人足の出入りが始まり、当日には人足75人と勝手方7人が記録されている。さらに屋根葺きでは、4月18日から準備に従事、6日間で106人が関与し、

その後6月1～6日には壁の下地となる木舞掻きや壁の塗り返しを行った。

以上の延べ人数は1285人で、延床面積61.5坪で割ると、1坪当たり20.9人となり、草野和夫氏が東北地方の民家で示した坪当たり人数の平均値9.6人^{文5)}に比べ圧倒的に多い。参加者の居所は、和田家が所在した萩園村のほか、今宿村・高田村・中瀬村・西久保村・中島村・南湖村・須賀村・茅ヶ崎村・大曲村・一之宮村に広がり、他村からの参加は全体の半数に及ぶ。草野和夫氏は、近隣の村から人足の従事には同じ領内の庄屋間での労力動員の申し合わせがあったと推測しており^{文5)}、和田家の家格の高さを示すといえる。

一方、三橋家については「普請中見舞覚」に各人が提供した人足の工数が記載されている。この延べ人数は99人半で、和田家の10分の1以下であり、どのような仕事に従事したのかは記録が無い。普請見舞の記録は中瀬村・濱之郷村・南郷村・萩園村・町屋村・田畑村の住人もあるが、物品や金銭の提供のみで労力供与は無く、人足は全て香川村の住人による。三橋家も、和田家同様名主などの村役人を勤めた家柄だが、影響力に差があったことがわかる。

4 三橋家・和田家の普請の特質

以上のように、三橋家と和田家の普請の様相には、家格や年代、所在地の相違が反映する。

三橋家の普請は、農繁期後の7月末から田植え前の2月までの7ヶ月で行われ、工期は建方と内部造作でほぼ同じだが、建方に多くの工数を費やした。茅ヶ崎砂丘の地勢を活かして、地元で入手できる松を主要材とし、屋根葺きに必要の茅や縄も地元で入手して建設した。普請に当たる建築職人も、建具職を除き2km圏内から出張し、地場の伐材を主としたため木挽の工数が多かった。用材の調達には、購入だけではなく村人の相互扶助も活かされ、労力提供も村内に限られた。つまり、土地の植生や相互扶助に支えられた、地域色の強い普請のあり方といえる。

和田家は、着工は年末だが、農繁期を避ける点は同様で、三橋家の3倍以上の大工数を充て、建方に3ヶ月半、内部造作に4ヶ月を費やす。多数の建築

職人を必要としたため広域から集め、村役人としての高い家格により、近隣村から広く人足の供与を受けた。用材もまた、広域の村々から良材を周到に採取するほか、製材済の角材・板材の購入も多用した。すなわち和田家は、領内全域に渡る地域社会の交流や、幕末期の商品木材流通の確立を踏まえた普請といえる。

この普請の相違が、完成した建物にどのように反映したのか、平面・意匠をみてみよう。

5 平面・意匠の特徴

(1) 旧三橋家住宅と旧和田家住宅の平面

まず平面は、旧三橋家住宅は桁行 10 間・梁間 4 間半、床上が 4 室から成る整形四間取（田の字型）を採る（図 6）。一方旧和田家住宅は、桁行 11 間半・梁間 5 間半、建坪は旧三橋家住宅の約 1.5 倍あり、6 室構成の六間取で（図 7）、やはり関東地方の民家の典型的な平面である。

各室の設備に注目すると、オクノマ（デー）に床の間、ナガト（ザシキ）に式台と神棚、チャノマ（板の間）に囲炉裏、オクナンド（ヘーヤ）に押入を備える点は共通し、順に儀礼、接客、居間・食事、就寝の場と推測できる。旧和田家住宅のナカノマ・ナンド列は上手側列を分化したといえ、部屋数は多いもののゾーニングは共通する。

異なるのは土間と床上の比率で、一般に民家は建築年代が古いほど全面積に対する土間の比率が高く、年代が下ると生活重視の考えから床上が充実すると指摘される。2 棟を比べると、旧三橋家住宅は土間と床上が五分五分で土間の率が高い。

土間部分を比べると、旧和田家住宅はオトコベヤを置くのみだが、旧三橋家住宅では下手側にウマヤとミソベヤを設ける^{注5)}。厩や物置は、主屋内に設ける場合と、別棟で置く場合があり、神奈川県内では、旧武蔵国域に当たる横浜市北部・川崎市では別棟で設ける傾向が 18 世紀末から強い一方、相模国域のうち小田原藩領外の秦野市・平塚市・厚木市・大和市など県央部では主屋内に置く傾向が強い^{文6)}。相模原市では明治 40 年の建物台帳では 36%^{文7)}、大和市も明治 22 年の建物台帳で 25%^{文8)}が付属屋を持たなか

ったことが指摘され、この影響から旧小田原藩領に当たる県西部でも 19 世紀中期頃から土間に下屋形式で厩・物置・味噌部屋等を設ける例が増加した^{文6)}。

茅ヶ崎市は、このうち県央部の傾向に当たり、旧三橋家住宅の附属部を土間に付設する平面は典型的な形式といえる。和田家の場合、移築前の敷地内には複数の土蔵や物置があったことが知られ^{文9)}、敷地や財力により複数の付属屋で構成する屋敷構を採ったと考えられる。

2 棟は、土間と床上境の構成も異なる。旧三橋家住宅は、ザシキや板の間の中央も含めて、土間境に 8 寸×7.5 寸の檼の柱が 3 本並ぶ。このように、土間境の柱を省略せず、径の太い柱（図 12）が並ぶ構成は、17 世紀後半とされる石井家住宅（鎌倉市、国指定重要文化財）にもみられる古い形式で、三橋家の普請帳ではこの柱を「大こくけやき」と呼んでいる。一方旧和田家住宅は、土間境中央に 1.12 尺×1.2 尺（34.5cm×37cm）、その西側に 1 尺×1.1 尺（31.4cm×33.5cm）の 2 本の檼の大黒柱が立つ（図 13）。ナガトやチャノマは、土間側に太い差鴨居を入れて柱を省略するため、土間との連続性や大黒柱の象徴性が強い。約 30 年の建築年代の相違が、土間境に現れている。

(2) 旧三橋家住宅と旧和田家住宅の意匠

次に外観は、旧三橋家住宅は屋根は寄棟造・茅葺き（現在はトタンで覆う）で、正面側のみ軒を出桁造とし、旧和田家住宅も同様である。民家は、一般に年代が下るほど天井高の確保や採光の向上のため、軒高が高くなると指摘される。旧三橋家住宅と旧和田家住宅は、一見後者の方が軒が高くみえるが、実際には正面側の出桁下端高が 9 尺（約 2.73m）、背面側の桁高が 10.5 尺（約 3.2m）で共通する（図 14, 15）。両者は床高も同じで、幕末期らしい特徴といえる。

ただし、旧和田家の方が梁間が大きいと、軒高が同じでも棟の高さは 4 尺（約 1.2m）以上高い。この点は内部空間にも影響し、旧和田家住宅は天井の高い豊かな室内空間を有するのに対し、旧三橋家住宅では屋根裏空間を確保するために天井高を低くせざるを得なかったのだろう。

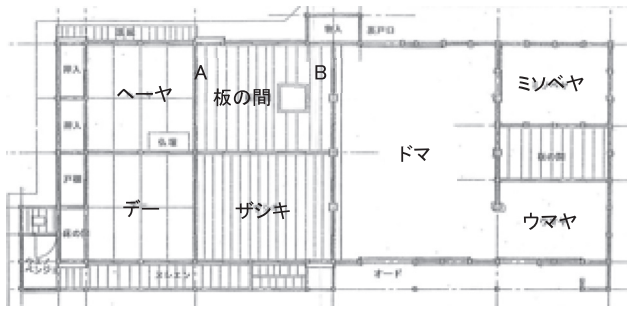


図6 旧三橋家住宅 平面図(移築後)

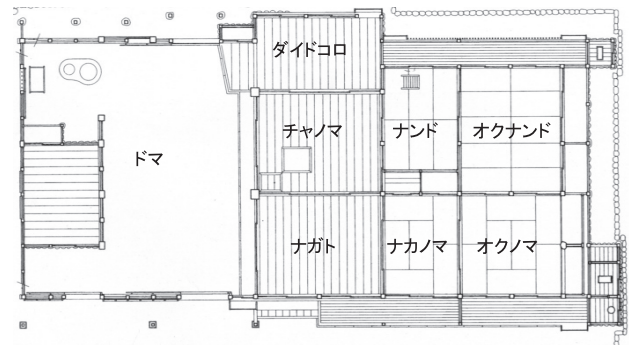


図7 旧和田家住宅 平面図(移築後)

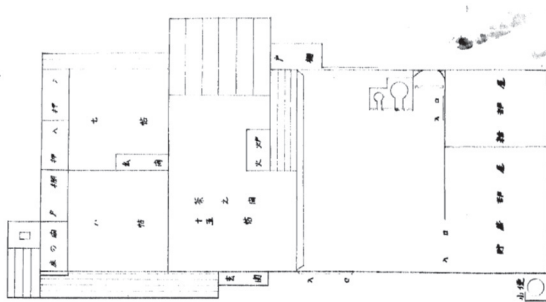


図9 明治3年 三橋家家相図 部分



図10 旧三橋家住宅
板の間痕跡(図6-A)

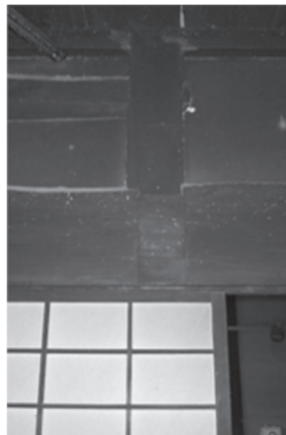


図11 旧三橋家住宅
板の間痕跡(図6-B)

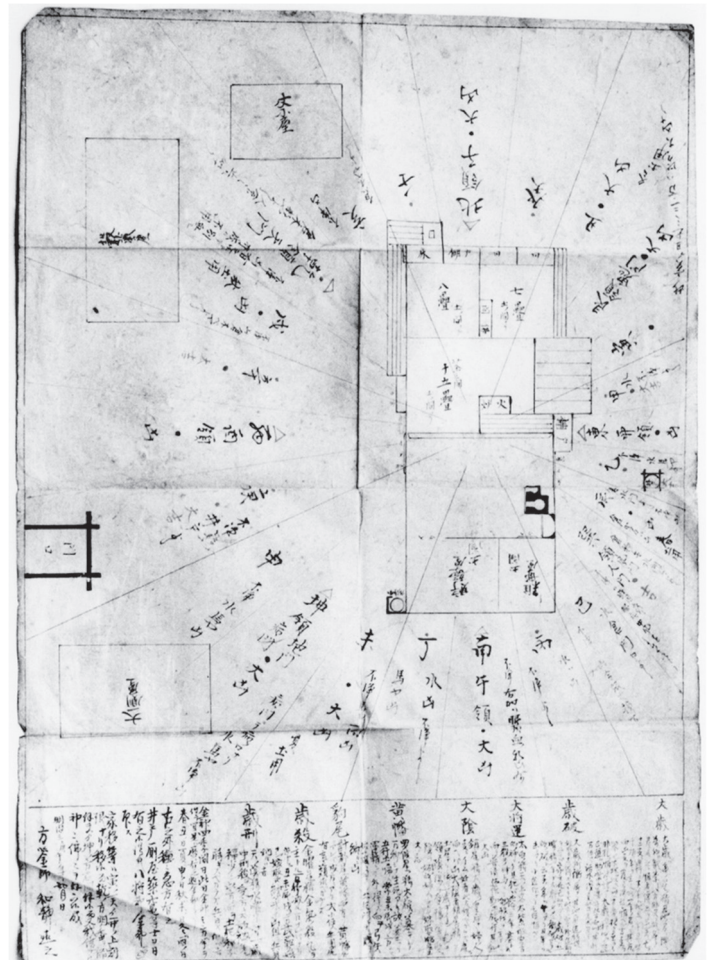


図8 明治3年 三橋家家相図



図12 旧三橋家住宅 土間・床上境



図13 旧和田家住宅 土間・床上境



図 14 旧三橋家住宅 断面図^{文11)}

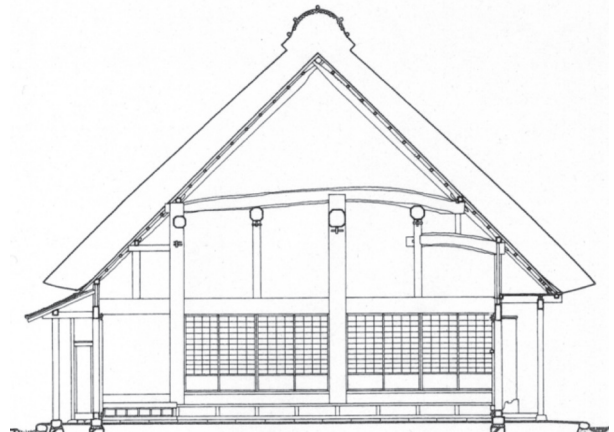


図 15 旧和田家住宅 断面図^{文9)}



図 16 旧三橋家住宅 デー



図 17 旧和田家住宅 オクノマ



図 18 旧三橋家住宅 板の間床組(解体移築時)

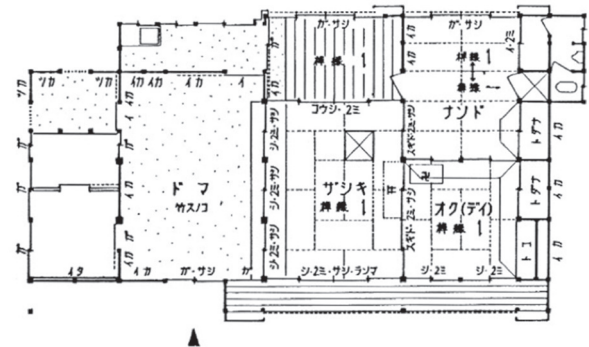


図 19 小川勝家(大和市上和田、明治改造)^{文8)}

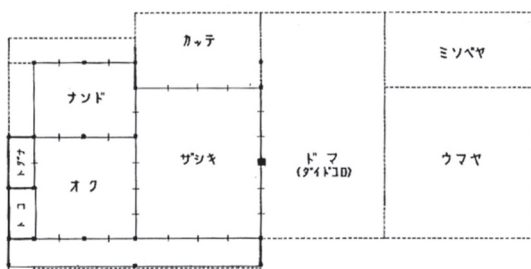


図 20 山口正家(大和市上草柳、明治 12~13)^{文8)}

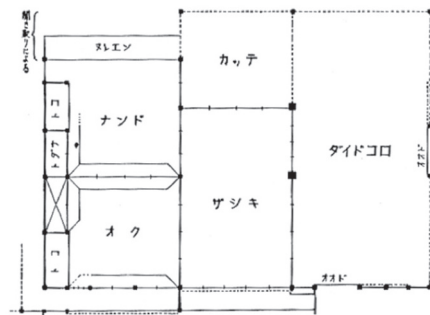


図 21 石井光治家(大和市下鶴間、明治7)^{文8)}

内部の仕様は、デー（図 14）・オクノマ（図 15）に長押を廻らし、床の間を設ける点は共通するが、旧和田家住宅のオクノマは床脇の棚を備え、床柱に白檀、床や棚の地板に櫟、天井板に縦の桎板を用いるなど意匠を充実する。欄間や建具の意匠も凝っており、これらは銘木の流通や広域の職人への依頼により実現したものである。また、旧和田家住宅は床上の全室を漆喰塗とするが、旧三橋家住宅は土壁である。先にみたように三橋家では普請時に左官職が不在であって、土壁は職人無しで施工可能だったと推測できる。

(3) 旧三橋家住宅の改造経緯と要因

ところで、先にみた旧三橋家住宅の文化財指定趣意書では「修繕や改造が少ないこと」が指定理由として挙げられている。

三橋家は、先述の棟札や普請帳以外に、明治3年(1870)の年記を持つ家相図が残されている（図8）。この平面は図9の通りで、土間部分の構成や上手の部屋列に違いは無いが、下手側はザシキの奥行が現状より1間半広く、板敷き部分が外に張り出す姿で描かれる。整形四間取より広間型に近い平面である。ただし、昭和47年(1972)の移築時に茅ヶ崎市建設部建築課が作成した実施設計図面^{注6)}によると、解体前の三橋家住宅は現状と同じ整形四間取である。一般的には、移築時に痕跡調査や復元考察が行われるが、残念ながら旧三橋家住宅には記録が無い。

そこで、現存する旧三橋家住宅をみると、家相図でザシキと板の間の境に当たる位置（図6-A,B）に差鴨居に痕跡があり、かつてはこの筋にも差鴨居があったことがわかる。また、現在のザシキ・板の間境の敷居は、仕口を柱に嵌め込んでおらず、取り外しが可能である。ただし、柱には敷居の仕口が残ること、その上部の差鴨居および梁は解体移築時の写真^{注7)}によれば後世の改変がみられないことから、創建時は整形四間取で、明治3年以前に部屋境をA・B間に移し、元の敷居は2室を連続して使用できるよう加工したと判断できる。外側に張り出した板の間については、当該位置の外壁が柱の戸袋等で隠されているため痕跡が確認できないが、下屋形式で部

屋を張り出したものと考えられ、これを昭和47年の移築以前に整形四間取に戻したことになる。

この2度の改変の理由として、養蚕への対応が考えられる。旧三橋家住宅の解体移築時の工事写真および床伏図によると、ザシキと板の間に複数の大炉の跡が確認できる（図18）。神奈川県央部の養蚕は、明治期には埼玉県本庄市の競進社で学んだ小林升らが導入した「温暖育」が主流で、炉で室内を温めて蚕の生育を促進する方法だった^{文10)}。蚕棚を1階にも2階にも並べ、炉を複数設けて住宅全てを利用した。旧三橋家住宅のザシキの拡張と炉の設置もこの養蚕のためのもので、同家には養蚕道具も多数残されている。

この家相図と類似する平面は、やはり養蚕が盛んだった大和市の民家に多数確認できる^{文8)}。図19～21に示すように、建築年代（または改造年代）は明治期に集中し、いずれもザシキの奥に板敷きのカッテを張り出す。これを参考にすれば、旧三橋家住宅の家相図で外に張り出した板敷き部分は、炊事場を独立して確保するためのものと考えられる。実は、旧和田家住宅も板敷きの「ダイドコロ」を外に張り出す形式を採る。すなわち、三橋家が養蚕用に改造した平面を、年代が下った和田家では創建当初から取り入れたといえる。

6 おわりに

以上のように、旧三橋家住宅と旧和田家住宅は、前者は原生植生や相互扶助に支えられた地域色の強い普請、後者は領内の広域に渡る地域社会の交流や、幕末期の商品木材流通を踏まえた普請によるもので、後者は座敷飾の完備や銘木の使用、漆喰壁の採用など、質の高い内部意匠にその成果が結実する。一方、旧三橋家住宅は、整形四間取の平面や厩や物置を内包する土間構成など、県央地域の典型例であり、土間境に太い大黒柱が3本並ぶ姿に古式を残す。茅ヶ崎での養蚕の隆盛による改造の経緯を伝える点も貴重であり、この改造が年代的に下る旧和田家住宅で新築時に取り入れられた点も、生業による民家平面の成立過程を物語る。

旧三橋家住宅と旧和田家住宅は、両者があってこそ、

地域性と経済社会の変化による茅ヶ崎民家の特徴と変容を後世に伝えられるのである。

〈注〉

- 1) 茅ヶ崎市文化資料館蔵。
- 2) 和田久徳氏蔵。
- 3) 水越家の系図は、水越家の墓碑銘、および鶴田あしかび「発刊を思い立ちて」(『あしかび叢書第三篇』あしかび舎、1959年所収)により判明する。
- 4) 『職人日記帳』『造作職人帳』には記載がないが、『諸入用覚帳』嘉永7年12月10日条に「なんこ 大工 亀吉」とある。
- 5) 明治期に馬は飼わなくなり、オトコベヤに改造したが、ウマヤの呼称は継承したという。
- 6) 「仮称民俗資料館移築工事」茅ヶ崎市建設部建築課、1972年。茅ヶ崎市文化資料館蔵。
- 7) 茅ヶ崎市文化資料館蔵。

〈参考文献〉

- 1) 小沢朝江「旧和田家住宅の普請と職人」文化資料館調査研究報告書18、茅ヶ崎市文化資料館、2009年。
- 2) 宮澤智士『日本列島民家史』住まいの図書館出版局、1989年。

- 3) 小沢朝江「水越家長屋門の建築とその背景」文化資料館調査研究報告書20、茅ヶ崎市文化資料館、2011年。
- 4) 『茅ヶ崎市史史料集第三集 茅ヶ崎地誌集成』茅ヶ崎市、2000年。
- 5) 草野和夫『近世民家の成立過程』中央公論美術出版、1995年。
- 6) 池永衣里・小沢朝江「旧相模国領における民家の土間・床上境の特徴とその意味」日本建築学会大会学術講演梗概集、2008年。
- 7) 『相模原市の民家』相模原市教育委員会、1986年。
- 8) 『大和市文化財調査報告書 第11集』大和市教育委員会、1982年。
- 9) 『茅ヶ崎市指定重要文化財 旧和田家住宅移築復元工事報告書』神奈川県茅ヶ崎市教育委員会、1985年。
- 10) 厚木市郷土資料館編「養蚕書と出版文化—養蚕文化はどう伝わったのか」厚木市教育委員会、2004年。
- 11) 『茅ヶ崎市指定重要文化財旧三橋家住宅調査報告書』茅ヶ崎市教育委員会、2009年。

*1 東海大学工学部建築学科・教授